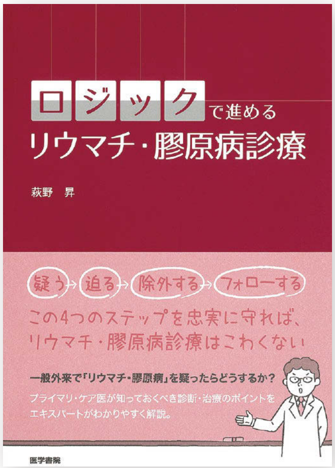
プライマリ・ケアにおける リウマチ・膠原病診療を底上げする

評者 矢吹　拓 国立病院機構栃木医療センター内科医長



ロジックで進める リウマチ・膠原病診療

萩野 昇＝著

定価：本体 3,800 円＋税
B5・176 頁／医学書院／2018
［ISBN 978-4-260-03130-1］

　膠原病診療に携わるプライマリ・ケア医のなかで、萩野（荻野ではない）昇先生こと “Dr. ハギー” をご存じない方はもぐりだろう。レクチャーのわかりやすさ、スマートさには定評があり、全国で引っ張りだこである。そんな Dr. ハギーが単著を出すとなれば、読まない手はない。本書は、ちまたではすでに「ロジリウ」なんて素敵な略称もつき、アイドルグループ顔負けの人気ぶりだという。

内科医でもある Dr. ハギー待望の単著「ロジリウ」

　今回、本書を読了した第一声は、「いやぁ、おもしろかった！」だった。まさに読後感爽快！　とはいえ、それだけでは書評にならないと怒られそうなので、もう少し具体的に。印象的だったのは以下の 3 点である。

❶リウマチ科医であると同時に、やはり内科医！
❷パール満載！　その博識とうんちくに脱帽
❸膠原病臨床の実践が丁寧に記載され、まるで Dr. ハギーが隣にいるかのような臨場感

　本書の中心はもちろんリウマチ・膠原病疾患なのだが、その端々に筆者が内科診療に真摯に向き合っている様子があふれ出ている。たとえば、「血液培養 2 セットの採取なしに PMR と診断してはならない」とか、リウマチ診療では「適切な降圧療法や脂質代謝異常の治療は、免疫抑制薬と同等か、場合によってはそれ以上に重要である」など至言の数々がある。

　クリニカル・パールも満載で、「皮膚を『読影』する」「結節性多発動脈炎は（中略）『リウマチ医の結核』」など、きら星のごとくだった。また、「Huggy’s Memo」と称された注釈や各領域の歴史的な変遷の語りも、またグッとくる。ヒューリスティックスやトラジェクトリーなど視覚に訴え「システム 1」をわかりやすく解説したかと思えば、SPRF アプローチや思考過程を余すところなく丁寧に記載した構成で「システム 2」を開示する。何とも贅沢な 1 冊である。

　本書が多くのプライマリ・ケア医に届き、リウマチ・膠原病診療の底上げがなされることを願っている。そして、「ありがとう、Dr. ハギー（オギーじゃないよ）」。 Ⓖ

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2018

2026/09/20 04:13:39